

# 高齢者の暮らしを考える

現在、認知症患者は全国に462万人いて、高齢者の15%（7人に1人）の割合となっています。2025年には、5人に1人になると推計されており、極めて身近な病気であると言えます。松阪市では「認知症支援の充実」をきっかけ認知症になっても安心に暮らせるまちづくりを目指しています。今回は様々な取り組みを行っている高齢者安心見守り隊三雲の高瀬良弘さん、第二地域包括支援センター柴田昌彦さんに話を聞きました。

## インタビュー

「認知症になっても安心して暮らせるまちづくりのために」

具体的な取り組みはなんでしょう。



柴田 昌彦さん  
第二地域包括支援センター

松阪市では、「認知症を予防するまち」「認知症になっても安心のまち」の二つをコンセプトに市と地域包括支援センターが協力して様々な取り組みを行っています。その一つに認知症サポーター養成講座があります。何か特別なことをするのではなく、正しい理解

高齢者安心見守り隊として活動されている想いを聞かせてください。



高瀬 良弘さん  
高齢者安心見守り隊三雲

やはり「認知症は決して他人事ではない」という気持ちが強くなります。年齢が高くなるにつれ、もし自分が認知症を発症しても、地域で安心して暮らし続けたいという想いを誰もが持っています。そこから地域の住民は地域で守り自分たちで安心して暮らせるまちづくりをしていかなくてはと考え、昨年11月に地域での具体的な活動の第一歩として模擬訓練を行いました。内容は認知症の方が出かけたまま行方不明になるといった事件・事故を想定して、認知症の方へ声をかける「見守り、声掛け訓練」をしました。100人以上の多くの参加者を班別に役割を決め、皆で協力し合いながらの訓練でした。警察への届出の模擬体験もしてもらいました。訓練を通じて参加者への意識づけができ、充実した内容になりました。初めてのことで改善点などもいくつかが挙がりましたが、今後もこのような訓練がいろんな地域で開かれ多くの方々の認知症に対しての意識向上につながるよう励んでいきたいと思っています。

大切なのは地域力です。自分たちで安心して暮らせるまちをつくるために、幅広い世代の方にどんどん参加してもらいたいのです。

## 寄り添う支援の充実のために

市では、地域包括支援センターと連携して認知症の方を地域で支えるしくみづくりに取り組んできました。現在、認知症のことを学んだサポーターは18000人、その中で「高齢者安心見守り隊」に登録している方は900人を超えました。それこれにできることを地域で展開してもらい、心強い限りです。これも認知症が他人事ではないという確かな想いを持った方々の協力があったからこそ。「自分たちで住みよいまちをつくる」という願いの実現のために、市も一緒に手をたずさえて取り組みを進めます。



1月30日(土)松阪市の認知症支援の取り組みが全国キャラバンメイト連絡協議会推進委員会から表彰されました